

## Hc-26 肺癌切除例の予後に対する樹状突起細胞の影響 九州大学第二外科

○横山秀樹，井上 隆，杉尾賢二，石田照佳，杉町圭蔵

【はじめに】抗腫瘍免疫に関与すると言われる樹状突起細胞の原発性肺癌切除症例の予後に与える影響について検討を加えたので報告する。

【対象および方法】1985年より1990年の間に当科において切除した原発性肺癌症例113例を対象とした。組織型別内訳は腺癌60例，扁平上皮癌45例，大細胞癌8例であった。病期別内訳はⅠ期56例，Ⅱ期6例，ⅢA期36例，ⅢB期8例，Ⅳ期5例であった。対象症例のホルマリン固定パラフィン包埋切片を用いS-100タンパク質を酵素抗体法にて染色し，陽性細胞を樹状突起細胞とした。樹状突起細胞の出現の程度の判定は10視野（強拡大）中の陽性細胞を計数し，1視野平均の陽性細胞数が20個以上のもを強陽性群，20未満のもを弱陽性群とした。

【結果および考察】原発性肺癌全体では強陽性群は50例（44%）弱陽性群は63例（56%）であった。なお性・年齢・TNM因子・病期・組織型手術根治度の各背景因子とS-100タンパク質陽性細胞の出現の程度と間に統計学的有意な差はなかった。次に，強陽性群と弱陽性群の5年生存率はそれぞれ76%，48%であり，強陽性群の予後が良好であった。

【結語】樹状突起細胞強陽性群は弱陽性群と比較して予後が良いことから抗腫瘍免疫との関与が示唆される。樹状突起細胞の出現の程度は予後を規定する因子の一つと考えられる。

## Hc-28 正常肺組織とStage I期肺癌組織におけるHLA抗原の対比（第3報）

長崎大学第一外科

○吉田一也，田川 泰，岡 忠之，辻 博治，原 信介，川原克信，綾部公懿，富田正雄

【目的】腫瘍免疫系のEffector細胞（CTL, Helper-T）が癌細胞を認識する為には，HLA抗原の発現が必要であると言われ，癌の進行に伴ってHLA抗原が消失することが指摘されている。今回，我々は正常肺組織とStage I期の肺癌組織におけるHLA-ABC, DR抗原の発現について比較検討した。【対象と方法】1988, 7~1991, 4における肺癌切除症例62例で，Stage I期は33例であった。組織切片をAceton固定を主とするAMeX法にて固定し，Paraffin包埋ブロックを作製。ABC法により組織染色を行ないHLA抗原の発現を評価した。【結果】正常肺組織：HLA-ABC抗原は肺胞上皮45/51（88%）細気管支上皮12/25（48%）で，HLA-DR抗原は肺胞上皮39/51（76%）細気管支上皮8/25（48%）で陽性であった。肺癌組織：HLA-ABC抗原は全体で35/62（57%）に対しⅠ期22/33（67%）で，そのうち腺癌14/20（70%），扁平上皮癌9/14（64%）とⅠ期で発現が高い。HLA-DR抗原は全体が27/62（44%）に対しⅠ期18/33（55%）で，そのうち腺癌17/20（85%），扁平上皮癌1/14（7%）であり，Ⅰ期の腺癌で発現が高い。またHLA-DR抗原が正常肺組織で陰性で癌組織で陽性の症例が4例あり，全てⅠ期の腺癌であった。したがってⅠ期の腺癌はEffector細胞から認識されやすい傾向があると思われる。さらに腫瘍浸潤リンパ球のサブセットについて検討する予定である。

## Hc-27 肺癌例の肺組織の病理学的変化（第3報）

千葉大肺癌研病理<sup>1</sup> 第一臨床<sup>2</sup> 第二臨床<sup>3</sup> 国療沖縄病院<sup>4</sup> 琉球大第二病理<sup>5</sup> 名古屋大予防医学<sup>6</sup> 千葉県がんセンター<sup>7</sup>

○石橋正彦<sup>1</sup> 林 豊<sup>1</sup> 河野俊彦<sup>1</sup> 大和田英美<sup>1</sup> 山口豊<sup>2</sup> 長尾啓一<sup>3</sup> 源河圭一郎<sup>4</sup> 岩政輝男<sup>5</sup> 大野良之<sup>6</sup> 福間誠吾<sup>7</sup>

肺癌死亡率の高い沖縄地域の症例の肺に末梢の上皮の過形成巣（以後H巣）が多発していることを過去二回に亘って林らが報告したが，さらに症例数を増やし年令別にまとめた。又AgNORs染色を行なった。材料・方法：以前と同様に国療沖縄病院肺癌手術例100例（114例），琉球大剖検例（主に非肺癌例）74例（21例）（ ）内は既に報告済み）につき肺切片3~8ヶ切りだし病理組織学的に検索しH巣を顕著となる程度に従いⅠ，Ⅱ，Ⅲに分類しさらにⅢを細胞の異型性のないものとあるものをⅢa, Ⅲbに区分した。これに既に報告の症例を加え加令による検討を行なった。AgNORs数は総計169例で各々100個の細胞を計測し平均値を出した。

結果：手術例においてⅢa, bは腺癌で50才台，扁平上皮癌で60才台以上のみ見られ又H巣の内訳は加令と共に，より程度の高いものの割合が多かった。剖検例では特に傾向は明らかではなかった。AgNORs数の平均値は細気管支上皮1.25, Ⅰ1.52 Ⅱ1.82, Ⅲa 1.88, Ⅲb 1.94, Ca 2.66, 扁平上皮化生2.11でありH巣は細気管支とCaの中間の値で，程度と共に増加していた。

## Hc-29 5年間陰影の大きさの変わらなかった管状腺癌を伴った肺異型腺腫様過形成の1例

—PCNAによる免疫組織化学的検討—

東京都多摩老人医療センター臨床病理科<sup>1</sup>，土浦協同病院外科<sup>2</sup>，同内科<sup>3</sup>

○横瀬智之<sup>1</sup>，浅見英一<sup>1</sup>，藤原明<sup>2</sup>，船越尚哉<sup>2</sup>，館治彦<sup>3</sup>，篠原陽子<sup>3</sup>

胸部レ線5年間陰影の大きさに変化を来さず，手術材料にて管状腺癌を伴った異型腺腫様過形成と診断された症例Aについて，PCNA（Proliferating Cell Nuclear Antigen）を用いた免疫組織化学的方法により，細胞増殖能について検討した。

方法：対照として，細気管支肺胞型腺癌（B）4例，細気管支肺胞様増殖を伴う腺癌（C）10例を用いた。抗PCNA抗体（Dakopatts）を用い，SAB法にて核内PCNAの発現を観察した。発現の頻度は，各部位とも500腫瘍細胞中の陽性細胞の割合を求めた。

結果：症例Aの管状腺癌部98.5%，異型腺腫様過形成巣20.8%。B群：86.6%（50-93%）。C群：乳頭状ないし管状腺癌部84.1%（70.3-91.3%），細気管支肺胞様増殖巣83%（78.4-94.6%）。いずれの症例でも，腫瘍周辺部の肺胞上皮細胞には陽性像を認めなかった。

考察：症例Aで異型腺腫様過形成とされた部位はPCNAの発現については明かに癌病巣とは異なり，低増殖能部であることが示唆された。